

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 20 号

平成15年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

印刷・発送人 〒285-0844 佐倉市上志津原 34 佐藤れん

電話 043-487-7030

### 内村鑑三「一日一生」より(4)

9月30日

生きているのはもはや、わたしではない。キリストが私のうちに生きておられるのである。しかし、わたしが今肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって生きているのである。(ガラテヤ書 2.20)

クリスチャンはその信仰的実験によって、聖霊は主イエス・キリストであることを知る。かれらにとりてキリストは故人ではない。すなわち単に歴史的人物ではない。彼はいまなおいましたもう者である。彼はすなわち黙示録記者のいわゆる「今いまし、昔いまし、後いますもの」(注)である。クリスチャンが他の宗教信者とその信仰を異にする点はまったくここにある。彼らは死せる昔の英雄を慕う者ではない。いま存在する主に仕うる者である。かれはまことにいまある葡萄の樹であって、われらはその枝である。われらは彼を離れて存在する者ではない。キリストと信者とのこの個人的関係、これがキリスト教の特徴である。これなくして、聖書も神学も教会も教義もなんでもない。しかしてこれありて、すべてがあるのである。

注 ヨハネ黙示録 1.8

10月20日

だれでも受ける訓練があなたがたに与えられないとすれば、ほんとうの子ではない。その上肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従して、真に生きるべきではないか。肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のために、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。(ヘブル書 12.8 - 10)

人生の目的は神を識(し)るにある。「ただ一の神なるなんじと、そのつかわししイエス・キリストを知ること、これ永生(かぎりなきいのち)なり」(注)とイエスは言いたもうた(ヨハネ伝 17.3)。しかして艱難にしてみてもこの目的を達するために必要であるとならば、艱難は決して災禍(わざわい)ではない。恩恵(めぐみ)である。しかしてヨブの場合において、艱難はこの祝すべき目的を達したのである。しかしてわれらの場合においても、また艱難によらずしてこの祝すべき目的は達せられないのである。イエスご自身が「苦難を持って完(まっとう)せられ」たのである(ヘブル書 2.10)。われらもまたイエスの苦難を受けずしては、彼のごとくになることができないのである。

10月23日

あなたの目は、まっすぐに正面を見、あなたのまぶたはあなたの前を、まっすぐに見よ。あなたの足の道に気をつけよ、そうすれば、あなたのすべての道は安全である。右にも左にも迷い出でてはならない。あなたの足を悪から離れさせよ。(箴言 4・25 - 27)

進め。どこまでも進め。前途を疑懼(ぎぐ)せずして進め。倒るるも退(ひ)くなかれ。明日は今日よりも完全なれ。明年は今年よりもさらに一層勇壮にして、快活にして、謙遜にして、独立なれ。進化の宇宙に存在して、退くものは死する者なり。安全は退きて求むべきものにあらずして、進みて達すべきものなり。歡喜(よろこび)と満足とは前にありて、後(うしろ)にあらず。臆病者に平和あるなし。進め、どこまでも進め。

10月28日

一緒（いっしょ）に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿（すがた）が見えなくなった。彼らは互いに言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明かししてくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」。 (ルカ伝 24.30 - 32)

余は聖書は神の言葉（ことば）であると信ずる。これにくらぶべき書は、宇内（うだい）万巻の書中、一もないと信ずる。余は聖書によるにあらざれば、人類は到底神の聖旨（みむね）を悟ることができないと信ずる。世は人の救いなるものは、聖書の研究と離るべからざる関係をもつものであると信ずる。余はもし人ありて、余に世界億万の書中ただ一書を選べと言うならば、余はキリスト教の聖書を選ぶものである。聖書はまことに世界唯一の書である。聖書はまことに神の書である。もし人類の有するものの中でもっとも貴いものは書物であるというならば、聖書は書物中でもっとも貴いものである。

1 1月3日

キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そして、あなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらであり、(コロサイ書 2・9 - 10)

キリスト教は信仰のことである。しかり、パウロの言に従えば、キリスト教はキリストであるとのことである。ゆえにキリスト教を学ぶに、オクスフォードまたはケンブリッジに学ぶの必要はないのである。またヨークまたはカンタベリーの大僧正についてこれを質問(ただ)すの必要はないのである。「イエスは神に立てられて、汝らの知恵、また義、また聖、また贖いとなり給えり」(注)と使徒パウロはいうた。信者の神学はイエスである。かれの潔斎(きよめ)はイエスである。かれの完成はイエスである。しかり、イエスである。教会ではない。監督ではない。長老ではない。また彼らが唱道する神学または教義ではない。イエスを信じて、われら日本人もまた、今日直ちにキリスト教の奥義に達することができるのである。

注 コリント第1書 1・30

11月8日

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言についてこのいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちはみて、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。(ヨハネ第1書 1.1 - 2)

キリスト教は理論にあらずして事実なり、実験なり。理論のみをもってキリスト教を悟らんとするは、理論のみをもって科学を研究せんとするがごとし。理論のみを持って化学を研究遷都するがごとし。理論のみをもってしては、吾人は到底キリスト教の何ものたるかを了解しあたわざるなり。博士ハクスレー(注1)いえるあり、「哲理の聖殿において拝せんとするものは、まず実験室の前殿を通過せざるべからず」と。余輩もまたいわんと欲す、「キリスト教の聖殿(Holy of Hories)において霊なる神に接せんと欲するものは、まず心情の実験室を通過せざるべからず」と。歴史家ネアンデル(注2)のいわゆる「神学の中心は心情(ヘルツ)なり」との意も、けだしここに基するならん。

注1 トマス・ヘンリー・ハックスレー(1825 - 1895)イギリスの生物学者

注2 ネアンデル(1789 - 1850)ドイツの教会史家

11月11日

こういうわけで、わたしたちは、このように多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競争を耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわなないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。(ヘブル書 12.1 - 3)

われら救われるために何をなすべきかと問うに、ただイエスを仰ぎみんとのみと答うるまでである。祈祷が聴かれるも聴かれざるも、災禍(わざわい)が臨むも臨まざるも、罪が潔めらるるも潔められざるも、ただイエスを仰ぎみるべきである。クリスチャンの信仰は儒者のそれのごとくに内省的であってはならない。仰瞻(ぎょうせん)的でなくてはならない。汚れたる自己(おのれ)を日に三度(みたび)ならで百度(ももたび)千度(ちたび)かえりみればとて、それで自己の潔まりようはずはないのである。

11月15日

金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲張って金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分を刺しとおした。しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いを立派に戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはそのために召され、多くの証人の前でりっぱなあかしをしたのである。(テモテ第1書 6.10 - 12)

人は生れながらにして現世的である。彼は来世のことはこれをおぼわらんことを努む。彼に現世的たるをすすむる必要は少しもない。水の低きにつくがごとくに、人は地につくものである。しかして宗教は人を地より天に向かって引き上げるために必要である。宗教にして明白に来世的ならざらんか、世に来世を示すものは他に何もないのである。言うまでもなく宗教の本領は来世である。政治、経済の本領が現世であるがごとくに、宗教の本領は来世である。来世を明白に示さず、これに入るの道を教えない宗教は、宗教と称するに足らざるものである。宗教は人を現世の外に導き、彼の来世獲得の道を供して、間接にしかも確実に現世を救うのである。



11月19日

主に感謝し、その御名を呼び、そのみわざをもろもろの民の中に知らせよ。主にむかって歌え、主をほめ歌え。そのもろもろのくすしきみわざを語れ。その聖なるみ名を誇れ。どうか主を求めるものの心が喜ぶように。主とそのみ力とを求めよ。常にそのみ顔をたずねよ。(歴代志略上 16.8 - 11)

神にありてもっとも深いものは愛である。人にありてもっとも深いものは信である。神は愛をもって人に臨みたまひ、人は信をもってこれに応えまつる。ここに神と人との真個の和合が行わる。神の喜び、人の救い、天地の調和、神人の合一とはこのことである。神は永生(かぎりなきいのち)を人に賜わんと欲したもう。しかして人は信仰を以てこれを受く。賜わんと欲するの愛、受けんと欲するの信……宗教といい、永生といい、解するに難いことではない。神の愛と人の信、律法(おきて)も、預言も、福音も、神学も、これをもって尽きているのである。

11月21日

わたしのいましめを心にいだいてこれを守るものは、わたしを愛するものである。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人に私自身をあらわすであろう。(ヨハネ伝 14.21)

聖霊を受けんと欲すれば神の誠命(いましめ)を守らなければならない。聖霊は単に祈っただけではえられない。聖書を研究しただけでは得られない。決心と勇気をもって神の命令を実行して、豊かに与えられる者である。聖霊は神がその子の善行に報いんがために下したもう最大の恩賞である。われらは信仰の行為によってのみ聖霊の獲得を確実にすることができる。研究によって霊欲を起し、祈祷によってこれを呼び求め、実行によってこれを獲得するのである。実行はまことにもっとも有力なる祈祷である。「働くは益なり」と言うが、神の最大の賜物たる聖霊を獲んとするにあたって、その殊(こと)にしかるを覚ゆるのである。